ぐんま教育のつどい2012

震災・原発・ボランティア―今、私たちは若者をどう育てるか？

2月11日土曜日、群馬県青少年会館において「ぐんま教育のつどい２０１２」が開かれました。今年のテーマは「絆～つながる思いが未来を拓く～」。テーマにふさわしく、教職員をはじめ、一般の方々や大学生、高校生など101人が参加し、教育やそれをめぐる状況、さらに東北大震災からの復興や原発事故の問題などについて熱く語り合いました。

まず午前の全体集会は、前橋市立高校の吹奏楽部の生徒による金管アンサンブルの、気品あふれる演奏で和やかに幕を開きました。

前橋西高校吹奏楽部によるアトラクション

続いて「高校生が大人になるために　私たちが市民になるために～県立桐生工業高校の東日本大震災ボランティア報告から学ぶ～」をテーマに、全体企画が催されました。この企画には桐生災害ボランティアセンター（以後ＫＶＣと略）長の宮地由高さん、桐生工業高校（以後桐工と略）の豊島卓司校長、桐工の現役生徒３名の参加があり、社会貢献やボランティアについて多面的に考えることができました。特に、現役校長が参加してくれたことは画期的な出来事でした。

昼食を挟み、午後には「授業づくり」「生徒の主体的な自治活動」「地域と教育」「語ろう考えよう、原発と放射能問題」の４つの分科会が開かれました。各分科会とも参加者からの積極的な発言があり、全体を通して意義深い集会となりました。

全体集会から

～桐生工業高校の東日本大震災ボランティア報告から学ぶ～

＜桐工生によるプレゼンテーション＞

パワーポイントを用いた25分ほどの報告。津波によって流木や泥にまみれてしまった病院からの瓦礫の運び出しや泥掻きの様子がビデオや写真によって映し出されました。被害の悲惨な状況にたじろぎながらも、明るさを失わず、熱心に作業に取り組む高校生たちの姿が印象的でした。

★現地に行っての第一印象は、大きな瓦礫が運び出してあったりしたので、「人がこんなに出せるのか。人の力はすごい」というものだった。また作業中にたまった泥水が何とも言えない強烈な臭いを発していたのが印象的だった。

★行く前は正直、放射能のことなど心配なこともあったし、ボランティアは大人でなければできないと思っていたが、実際に行ってみて自分たちでもできるのだと思った。今回の参加で、ボランティアが遠いものから近いものになった。ただ、自分一人で行けと言われたら躊躇してしまう。行ける環境が整っていればこれからも行きたい。

※当フォーラムでは、この活動をいち早く取材し、ニュース第9号の「すなっぷ」（2011年7月）に掲載しています。

＜桐工校長・豊島卓司さんの発言＞

生徒、職員全員にボランティア参加を呼びかけた。学校ぐるみの参加には勇気がい

っただろうとの声もあるが、自分としては「あたりまえの」ことをしただけという気持ち。多少の困難があっても、勇気を持ってせねばならないこともある。

実施にあたっては、生徒が参加しやすい環境を整え、自分で見て活動するということを重んじた。厳しい現実を見せることに不安がなかったわけではないが、とにかく行ってみることは大切なことと思った。最も注意を払ったのは、安全性の確保と授業の確保。その上で、なるべく早く、連休明けにも行きたかったが、教育課程上での位置づけ（校外学習と位置づける）など調整せねばならないこともあり､開始が遅れた。

保護者からはマイナスの働きかけはなかったし、逆に保護者からも行きたいという要望すらあった。部活や資格試験、親の反対などで行けなかった生徒もいたが、生徒にはそれぞれ事情があるのでそれらに配慮することは大切。

災害復興のボランティアに参加した経験は、近いところでは採用試験などでも生きるだろうし、それだけでなく若い時の経験は後になって生きてくる。

桐生工業高校の生徒さんたち

今回桐工が学校ぐるみでボランティアに取り組めたのは、桐生にはＫＶＣというしっかりした組織が存在したから。他が進まないのはこのような組織がないからだろう。活動を継続させたい気持ちもあるが、自分は今年退職してしまう。引き継ぐことは簡単なことではない。

＜ＫＶＣ長・宮地由高さんの発言＞

阪神大震災の経験から、現地のセンターはうまく機能しないことがわかっていたので、震災直後にＫＶＣを設置した。まずは被災地と桐生とのきずなをつくることから始めた。

最初に参加した 40 人は行ってきて確かに変わった。こういう経験を若者にさせるのも大人の役割だと考えている。こちらの事情に合わせるのではなく、学校の事情にあわせてボランティアをやってゆく。現地を見るのとそうでないのとは全く違う。見ることだけでも、これからの復興に向けての第一歩となる。

桐生がいち早く支援に向けて動けたのには 3 つの理由がある。

① お金があった。(震災当時 300 万円の資金｡ボランティアは自分でお金を稼ぎ出すという意識も必要｡ＫＶＣは祭りなどに出店したり､寄付を呼びかけたりして積極的に資金作りをしている)。

② さまざまなボランティア活動を通してボランティア・リーダーが育っていた。

③ これまでの活動を通じて､ボランティアに対する市の職員の意識改革も進んでいた。

実際の活動では生徒は実に一生懸命やってくれた。最初は正直、遠足気分が抜けきれない者もいたが、向かう途中で意識の変化があった。失礼なことがあってはという不安もあったが、現地で無言で作業に取り組む姿を見て、生徒を見直した。

自分の家には代々、「人助けは当たり前」という雰囲気があり、関東大震災の時にも炊き出しをやったと聞いている。さらに、「寄付の文化を桐生に」という気持ちを持ってやっている。これからも、いいと思ったことはどんどん実行していきたい。

《文責・写真：高崎商業高校・澁谷正晴》